

田上 時子のエッセイ

## 沖縄県辺野古・高江で起きていること

三上智恵監督による映画『標的の村』は、日本にあるアメリカ軍基地・専用施設の74%が密集する沖縄で、新型輸送機「オスプレイ」着陸帯（ヘリパッド）建設に反対し座り込んだ東村・高江の住民をドキュメントした作品。

それを47分に編集し直したのをyoutubeで見た娘の「沖縄の高江に行こう」との誘いを受けて、新年の正月休みは沖縄行きと決め、那覇を宿泊地にしてレンタカーで、1月3日は辺野古へ、4日は東村・高江へ向かった。

普天間基地の返還問題で移転先として名護市辺野古の名前があがったのが1996年。以来、名護市民の意志は無視され、新基地計画を二転三転させられ、20年後の現在まで反対運動は展開されている。

辺野古テント村の入り口に、書かれた横断幕「勝つ方法はあきらめないこと」に出迎えられ、テント村の中で交替で座っている人たちから丁寧な現状と課題の説明を受けた。

辺野古沿岸海域は、緑豊かな山々とサンゴの海に抱かれた県内でも有数の生態系の豊かな海域であり、とにかく目の前の海が美しい。

本土の主要メディアが普天間の代わりに辺野古移転が唯一の解決手段と繰り返すのを真に受けて「事実(=fact)」と受け取るかもしれないが、「真の事実(=truth)」は、普天間基地問題に関わらず、辺野古V字形沿岸案は日米両政府にとって祈願の巨大な軍事要塞構想であるということが分かってきた。

2日目、辺野古より更に車で北へ1時間、高江

に向かった。

沖縄北部の豊かな森に囲まれた地域をやんばる(山原)といい、高江はやんばるの中にある人口150名の集落である。

やんばるの森には地球上でここだけにしかない固有種や絶滅危惧種が数多く生息しているが、米軍基地の存在やヘリパッド建設が大きな障壁となっている上に、オスプレイの飛行訓練は始まっており、昼夜を問わず住居地や小中学校の上を超低空飛行していて、美しい自然豊かなやんばるの森やそこに住む生き物や住民が犠牲になっている。

9年間座り込んでいる70代の男性は、何のために座り続けているかという質問に「豊かな自然に囲まれた高江は戦争できる国へ向かう最前線となってしまっている。世界の子どもらが犠牲になっている戦争地で人殺しをしている米軍機が沖縄から飛び立つのを阻止したいから」と答える。

辺野古でも高江でも説明を聞きながら、私たちが耳にする「沖縄の基地負担削減」の策とは、実の目的は「基地の先鋭化と日米安保強化」にあるのではないかと、彼らが何年もの長い間声をあげても、政治的に解決されないのは、「日米安全保障条約」が国民すべての生存権を保障する「日本国憲法」より上にあるからではないかと考えた。

沖縄県民は日本国民である。沖縄の基地問題は沖縄の問題ではなく、私たち日本人一人ひとりの問題であることを確認する旅であった。